



# 人生・農業 リセット再出発!

RESET RESET RESET 第8回



国際線航空会社乗務員・作家  
**黒木安馬**

1950年熊本県生まれ。高校在学中にAFS奨学生で米国留学後、早稲田大学を経て航空会社に入社。業界の常識を破る「カラオケ・フライト」を企画して計7便飛ばし、後に北島三郎らによる「世界初1万メートル上空機上コンサート」も実現させる。自宅は28歳の時に1300坪の土地を開墾して2年半がかりでプールを手作りし、テニスコート、コンサートホールも造る。自宅ステージでは加藤登紀子、山下洋輪、坂田明、尾崎紀世彦など多くのライブやピカソ展を企画し、地域活性化触発運動「グループ・ザ・田舎るちあ」を主宰している。多くの実体験に基づいた人生成功哲学の講演や著書は大手企業でも人気を博して乗務の間をぬって全国を飛び回っている。著書に「面白くなくちゃ人生じゃない!」(KKロングセラーズ)、「出過ぎる杭は打ちにくい」(ワニブックス)、「リセット人生再起動マニュアル」(ワニブックス)、「小説・球磨川」(ワニブックス上下巻)がある。E-mail: kuroki-yasuma@love.biglobe.ne.jp

## 「従流史不変」

とは、世の中の流れや変化にはついて行くが、自分の信念を変えないことを言う。足元を大事にする天上天下唯我独尊でもある。

兵庫東北部日本海に近い但馬山中、猪も出る小人口の大屋町はかつて日本一のスズ産出を誇った明延鉱山廃坑後、過疎対策に悩んでいるが、信号機が一つも無い町として長年売りに出していた。最近になってようやく信号機が付いたらしいが、修学旅行では大阪などの都市へ信号機実習も兼ねていたというから面白い。そこに農業を営む青年、上垣康成君がいる。園科技工士を目指していたが今は校長を退職した父と一緒に但馬牛畜産と合鴨農業に精を出している。土地はあるが人手が足りない全国共通の悩みを抱えている。そこで近畿の都市部へDMを出して、田植えから手入

れ、刈り取りまで自分でやり、その収穫の何俵分かを分かち合う方法を考えた。手紙の送り先は私が紹介したが、かなりの反響で数家族が参加して田圃に裸足で入っている。以来素敵な鴨鍋交流も芽生えているとか。この町の青年たちは「過疎を逆手に取る会」も作り、ハタリ八割・ウソ二割から取った「ホラ八の会」を始め、会長と肩書の付く、書ききれないほどのタイトルが一枚の名刺に並んでいる。すべて言い出しつべが会長に就任して一晩に数件の会合・飲み会を持つ。

彼らとの出会いは、ドイツからボランテアでやってきたクラシック・コンサートの日本縦断ツアーを企画していた時のこと。新聞やTVで見たのだが、我が町にも是非来て貰いたいと電話の向こうでは必死な様子。飲み会での話：羨ましいことだが町にはピアノが

無い。だったら買えばいいじゃないか。とこるでいくらだ。最高のベーゼンドルファーで一千万円! よし、じゃあ皆でカンパを集めよう。翌日から酒の勢いに任せて行動開始。頭金が集まったところで気の早い連中はその高価なピアノを注文。すでにトラックはこちらに向かっているから、コンサートが来てくれないと全員首をくくるしかない、そんな後先のことを考えない悲痛な訴えである。この狂気にも似た熱意に動かされた。全国十五ヶ所の会場で一番燃えたのは言うまでも無い。会場では小学生がカンパに立った。それが高じて、豪華なコンサートホールまで造った。浄財流出をさせない為に大工も木材もすべて町内産に限った。そして著名人を盛んに呼んで定期演奏会を行う有名な音楽の町に変貌した。貸し別荘も作るなど次々とアイデアを実現させている。

既成事実を無視、進歩の無い十年一日の安寧を根底から引つ繰り返すような危なっかしいキワモノ集団である。が、それは大変な人財である。キワ崩しの異端児が村の高台に立つて笛を吹き始めた時に、出る杭を打つようであればお仕舞い。出る杭は打たれるが、出過ぎる杭は打ちにくい! より高く出るようにこそ応援する面白・村社会が肝要である。偏屈なほどの変わり者が歴史を変える。コペルニクスに始まり宗教革命しかり、明治維新では脱藩浪人たちの若き獅子たちが立ち上がった。後の英雄も当時ではみんな変わり者である。

錆は鉄より出でて鉄を腐らせ、愚痴は人より出でて人を腐らす。ヤラなかったのかヤレなかったのか? ヤラずしてヤレなかったと口実を見つけるのは容易だ。変わり者に変革を任せてみるのも、すがすがしい汗が期待できるかもしれない。